

## SERIES 明日のスポーツをめざして

## 岩手県ボート協会

常務理事(強化部長) 細越 哲浩

第66回国民体育大会「おいでませ！山口国体」において、ボート競技選手団は成年男子シングルスカル種目で米澤豪範選手(立命館大学、みちのくコカ・コーラRC)が2位に入賞し、岩手県選手団として秋田国体から5大会連続での入賞を達成した。

少年種目での岩手選抜クルーの編成に本格的に着手し始めたのが4年前の秋田国体からであった。選抜クルーの編成には異論もあったが、ボート競技における国体監督への公認スポーツ指導者資格の義務づけの方向性が明確化される流れもあり、実施へと踏み切った。昨年から成年種目においても選抜クルーを編成している。選抜クルーの編成については未だ試行錯誤を重ねている状況であり、改善すべき点も多いが成果もあがっている。

選抜クルー編成以前の国体は、高校総体に代表されるような、県内の学校ないしはチーム対抗戦の延長線上のものでしかなく、国体での成果はあくまでチームの取り組みによるところが大きかった。選抜クルーの編成を契機として指導者の視野の拡大がはかられ、学校・チームの枠を超え「岩手の選手」を育てる、という捉え方が定着しつつある。選手を岩手全体で見守り・育てる取り組みでもあり、継続していきたい。

一方で、選抜クルーの練習時間の確保に難しさを感じている。国体ボート競技の団体種目には

2人乗り・5人乗りがあるが、これは全員の一体感が昇華された動きの調和が必要であるため、クルー全員での乗艇練習時間をいかに確保できるかが競技結果に大きく影響する。短いシーズン中、広大な県土の数少ない練習場に選手を集めてトレーニングを行うことになるが、所属するチームの都合や競技用具の確保など調整が必要で、更なる創意工夫が求められている。また、加えてハイレベルでの競技力を維持するためには、選手と指導者の意識改革を意図した練習環境を整えていく必要があり、常に上昇志向を持つことに腐心しているところである。

以上は国体に向けての取り組みではあるものの、現在のボート競技が抱える問題に対する取り組みでもある。スポーツの果たす役割を考えたとき、競技種目の多様性は重要な要素の一つであると考えている。残念ながら、少なくとも本県では、様々な要因からボート競技は誰でも気軽に始められるスポーツとはいえないのが現状でもある。

県体育協会はもとより、関係各位のご助言、ご指導を得ながら、指導者の育成、練習場の確保、クラブチームの創設など、さらにボートに親しみやすい環境を構築すべく努力をしていきたい。

